

〔貞丈雜記^七酒盃〕一押物とは、花鳥山水の形などの作り物の臺に、酒の肴もりて出すを云ふ、

〔酌次第〕一をさへの物といふ事、いろ／＼のさかな出つくしてのち、まへのさかなどもををさへて、今一こん申たきといふ心なり、同又、さぎにより、にはかなどのとき、さかな調法なきのとき、をさへのものを出して參る事もあるべし、一通にはあるまじく候、何も、さぎによるべし、大かた先はじめに出事は、まれなる事にて候、ませんの儀なり、よく／＼あひ心得べし、一をさへの物と云事、すわまがたなど、又はちかみなどにして、いはくみなどのていをして、さてまゆ／＼のさかなをもるを云也、らつちや、とうちんかうなどももるべし、盃のていの心得に大にして、さてさかなをもり、はしををき候て出すををさへの物と云也、大小は又座敷によるべし、何も盃のだいよりは大きなるべし、

〔躰方明記^五〕おさへの物と云ふ事、臺に盃は置ずして、色々肴を盛箸を置出し申なり、肴の引様供饗のもの、同前、常に肴を引候時、賞翫にて候へば、折供饗食籠いづれも肴の臺共に持て參り、挾候て參候なり、同輩より以下へは臺をよするに不及、肴ばかりはさみて出し申ものなり、何れも時宜ニよるべし、

〔躰方明記^五〕おさへ物と云事、色々の盃出し盡して後、前の肴どもをおさへて、今一獻申度と、様々の肴の色を盛交出し參らす事もあるべし、一篇には有間敷事なり、

〔躰方明記^八〕おさへの物と云ふ事、或はすわまがた、又いろ／＼に岩くみなどの體をこしらへて、種々肴をもりて、はしを置て出し候を云ふなり、大小は又座敷にもよるべし、

〔公方様正月御事始之記〕一獻の時は、先折を出、其後かはらけものを可出候、此後くぎやうの物たるべく候、又おさへものは未つかたに出候、

〔酌次第〕一ひやし、物の事、なつはうりなど、又は何にてもすゞのはち、あるひはちやわんの物など